目次

はしがき12
『報復の書』18
第 1 巻18
1章 序文
2章 フラクシネトゥムの城とその位置について
3章 サラセン人がいかにしてフラクシネトゥムを占領したか
4 章 プロヴァンス人同士の反目のために招かれたサラセン人がプロヴァンスを荒廃
させた次第について
5章 この時代のギリシア人の皇帝、ブルガリア人、バイエルン人、フランケン人、
ザクセン人、シュヴァーベン人そしてイタリア人の王が誰であり、誰がローマ教皇と
して承認されていたのか
6章 なぜレオン帝はポルヒュロゲネトスと呼ばれているのか
7章 ポルヒュラ宮とこれの建設者について
8章 バシレイオス家の歴史とミカエル帝が彼を宮殿へと連れてきた次第について
9章 ミカエル帝の狂気、そしてバシレイオスが彼を殺して皇帝になったことについ
T
10 章 バシレイオスの夢の中で我らの主イエス・キリストがミカエルの死の件で彼に
申し開きを呼びかけたこと、同バシレイオスの行った施しについて
11章 レオン帝がある夜に見張りに捕まり、自分が皇帝だと認められずに収監されて
鞭打ちを受け、獄吏が彼を釈放し、皇帝自身が自分を鞭打たなかった見張りを鞭打ち
自分を鞭打った見張りを褒めたことについて
12章 同皇帝が眠っていた者たちに行った見事ないたずらと金貨について
13章 なぜアルヌルフ王が障壁を破ってハンガリー人を解き放ったのか
14 章 宣誓によって友情を確かめたが、後に決裂したウィドーとベレンガーリオ、そ
してこの種の友情が長続きできない理由について
15章 カール死後のベレンガーリオのイタリア王選出について
16章 失敗の報いとしてウィドーがフランク人から排斥された次第について
17章 ウィドーのイタリア帰還について
18章 ウィドーとベレンガーリオの戦いについて

19章 彼らの再戦とベレンガーリオの敗走について

20 章	アルヌルフがベレンガ-	-リオ救援のためにイ	タリアに送っ	った息子ゼンテ	ゾルド
につい	7				

- 21章 ランゴバルド兵がバイエルン兵を戦いで殺した次第について
- 22章 アルヌルフ王がベレンガーリオの招きでイタリアに来たことについて
- 23 章 同上のアルヌルフがベルガモを落としてアンブロージオ伯を縛り首にした次第について
- 24章 アルヌルフのもとにやってきたミラノとパヴィアの人々について
- 25章 アルヌルフを前にしたウィドーが撤退したことについて
- 26章 アルヌルフの戦いに向けた激励
- 27章 ローマのレオニーネが落ちた次第について
- 28章 フォルモスス教皇のためにアルヌルフが多くのローマ人の斬首を命じたこと
- 29章 なぜフォルモススとローマ人の間が険悪になったのか
- 30章 フォルモススの遺体を掘り返すよう命じたセルギウス教皇について
- 31章 フォルモススの遺体について、これがセルギウスによってテヴェレ川に投じられて漁師に見つけられ、聖人たちの彫像から挨拶を受けたこと
- 32章 アルヌルフが堅城と呼ばれる城を包囲してウィドーの妻が彼に致死性の毒を差し出した次第について
- 33章 アルヌルフの兵によってなされた危害について
- 34章 アルヌルフの帰国とウィドーの追跡について
- 35章 イタリア人がアルヌルフを冷淡に扱い、辺境伯アンスカーリオがイヴレーアで身を隠した次第について
- 36章 アルヌルフの恥ずべき死について
- 37章 ウィドーの死と彼の息子ランベルトの王位選出、ランベルトの排除とベレンガーリオの復権について
- 38章 ランベルトの排除とベレンガーリオの復権について
- 39章 ランベルトによって謀反人として斬首されたマギンフレッド伯について
- 40章 ランベルトと戦った辺境伯アーダルベルトとイルデブランド伯について
- 41章 ランベルト王がアーダルベルトとイルデブランドを夜に倒し、彼らの兵を殺して彼らを生け捕りにした次第について
- 42 章 ランベルトがマレンゴでマギンフレッドの息子ウーゴによって殺されて父の死 の仇を討たれた次第について
- 43章 ベレンガーリオがランベルトの死後に王位を獲得した次第について
- 44章 ランベルト王頌徳文
- - 1章 アルヌルフ死後に彼の息子ルートヴィヒが王になった次第について

- 2章 ハンガリー人がアルヌルフの死を聞いてバイエルンを攻めたこと
- 3章 ルートヴィヒがレヒ川でハンガリー人を攻撃する準備をしたこと
- 4章 ハンガリー人が待ち伏せでルートヴィヒ軍に勝利したこと
- 5章 ルートヴィヒの退却、ハンガリー人がフランケン人、ザクセン人、シュヴァーベン人の領土を荒らしたこと
- 6章 アーダルベルト伯の謀反、彼が大司教ハットーに騙されて斬首された次第について
- 7章 斥候が帰国を忠告したこと
- 8章 なぜハンガリー人が恐怖に駆られてイタリア侵略を断念したのか
- 9章 ハンガリー人が新手の軍を連れて戻ってきてイタリア人と遭遇した次第について
- 10章 なぜベレンガーリオ王が戦いに来ず、ハンガリー人がイタリア軍から逃げたのか
- 11章 退却する異教徒がキリスト教徒に和平を求めたが、そうならなかったこと
- 12章 ハンガリー軍が勝利し、やがて退却した前哨戦について
- 13章 馬の疲労のおかげで異教徒たちがキリスト教徒をブレンタ川で待って和平を請うことになり、これが拒絶された次第について
- 14章 自棄になったハンガリー人が続けてした相談、彼らが互いに言い合ったこと
- 15章 ハンガリー人が待ち伏せを仕掛けてキリスト教徒を攻撃し、打ち破った次第について
- 16章 彼らの勝利は勇気の故ではなくキリスト教徒の罪の故であること
- 17章 その時にいかにしてフランク人の王ルートヴィヒが死んでコンラートがその地位に指名されたのか
- 18章 彼の臣下の諸侯について、そしてその中にザクセン人の大公ハインリヒもいたこと
- 19章 ハインリヒと他の諸侯がコンラート王に反乱を起こすも鎮圧され、アルノルトがハンガリーに逃げた次第について
- 20章 コンラート王が死に際に全ての諸侯に平和を守ってハインリヒを王とするよう 促し、彼に王の印を渡したこと
- 21章 コンラート死後にアルノルトがハンガリーから戻ってきてハインリヒ王攻撃の 準備をしたこと
- 22章 ハインリヒがアルノルトの怒りを賢明な演説で宥めたこと
- 23章 アルノルトが部下の勧めでハインリヒの臣下になったこと
- 24章 ハンガリー人がコンラートの死を聞いてザクセンに攻め込んだこと
- 25章 ハインリヒ王が病床から起きて彼らに立ち向かったこと
- 26章 ハインリヒがいかにして兵士たちを戦いへと激励したか

- 27章 ハインリヒ王の見事な宣誓について
- 28章 ハンガリー人がメルセブルクにいると報告した伝令について
- 29章 ハンガリー人が捕虜に戦況について尋問し、斥候を送り出したこと
- 30章 ハンガリー人との戦いについて
- 31章 ハインリヒ王の良き忠告、彼の勝利、彼の勝利が絵に描かれたこと
- 32章 イタリア人が自分たちを支配してもらうべく招いたルイなる者について
- 33章 これはベレンガーリオの義理の息子である辺境伯アーダルベルトのせいだったこと
- 34章 同アーダルベルトが最初は善人だったが後に悪人になったことについて
- 35章 ルイがベレンガーリオ王への恐怖から誓約をして帰国したことについて
- 36 章 トスカナ地方の有力な辺境伯アーダルベルトが妻ベルタに唆されてベレンガー リオを見限ってルイに手紙を送ったことについて
- 37章 ルイがイタリア人に歓迎され、ヴェローナに退却したベレンガーリオがルイによってその都市から追い出されたこと
- 38章 ルイがルッカに向かい、アーダルベルトから豪勢な歓迎を受けたこと
- 39章 ルイがアーダルベルトの権勢を妬み、アーダルベルトが彼から離反したこと
- 40章 ヴェローナ市、アディジェ川、その川にかかる橋についての記述
- 41章 ベレンガーリオがヴェローナ市の見張りを買収してルイを捕らえ、彼の目を潰した次第について
- 42章 その時にハンガリー人がイタリアを荒らし回ったことについて
- 43章 フラクシネトゥムのサラセン人がイタリアの一部を荒らし回り、アックイに来たこと
- 44章 アプリア、カラブリアそしてベネヴェントを奪取してガリリャーノ山に砦を築いたアフリカのサラセン人について
- 45章 サラセン人がアフリカを発った理由について
- 46章 これは我らの矯正とするための主の思し召しであること
- 47章 当時のラヴェンナのヨハネスが教皇として承認された次第について
- 48章 このヨハネスが売春婦テオドラによって教皇になった次第について
- 49 章 教皇のもとにやって来てアフリカ軍攻撃の方策を助言したあるアフリカ兵について
- 50章 この同じアフリカ兵が待ち伏せ攻撃をして彼の同胞を殺した次第について
- 51章 ベネヴェント公ランドゥルフの忠告について
- 52章 いかにして教皇がコンスタンティノポリスへと使者を送り、皇帝からの援軍を受けてアフリカ軍と戦ったか
- 53章 ギリシア軍の到着、山の近くでの彼らの布陣について
- 54章 全アフリカ軍が殺されるか捕らえられるかし、栄光ある使徒が戦い中に現れた

次第について

- 55章 トスカナ地方の辺境伯アーダルベルトが死に、彼の息子ウィドーが彼の地位につき、ウィドーの母がベレンガーリオに捕らえられたこと
- 56章 ベルタがアーダルベルトとの間に儲けたと思われる子供たちについて
- 57章 どれほど多くの諸侯がベレンガーリオに対する謀反にあたってミラノ大司教ランペルトに味方したのか、そしてなぜ彼らはそうしたのか
- 58章 ベレンガーリオが捕らえて折悪くランペルトに監視を委ねた宮中伯について
- 59章 ベレンガーリオが捕虜引き渡しを要求し、ランペルトがそれに従わなかった次第について
- 60章 ブルヒャルト大公の娘と結婚し、イタリア人から来て王になって欲しいと招かれたブルグント人の王ロドゥルフについて
- 61章 ベレンガーリオ王の友人のハンガリー人がオデルリックを殺して王の義理の息子アーダルベルトとギセルベルト伯を捕らえた次第について
- 62章 辺境伯アーダルベルトがハンガリー軍を騙して安い身代金で済ませた狡猾な詐術について
- 63章 ギセルベルトが捕らえられ、鞭打たれて王の面前に連れていかれ、これを憐れんだ王はありとあらゆる栄誉の印をつけて彼を解放した次第について
- 64章 同上のギセルベルトがドロゥルフ王のもとに行って彼をイタリアに連れてきたことについて
- 65章 ベレンガーリオとロドゥルフの内乱について
- 66章 いかにしてロドゥルフが血縁のボネファチオの助力によって勝利を得たのか
- 67章 ロドゥルフがイタリア人の同意の下でブルグントに戻ったこと
- 68章 ベレンガーリオ殺害を企んだヴェローナの人々について
- 69章 ベレンガーリオ王がフランベルトにした賢明な話
- 70章 王によってフランベルトに与えられた黄金の杯について
- 71章 フランベルトの扇動でベレンガーリオ王が殺された次第について
- 72章 今日ですら王の血が街路で見えることについて
- 73章 ベレンガーリオの家臣で、主君の仇を討ち、罪が犯された3日後に殺害者たちを縛り首にしたミロについて

第3巻......71

- 1章 この著作になぜこの題名がつけられたのか
- 2 章 ベレンガーリオの死とロドゥルフの出発の後にハンガリー人がイタリアを荒ら した次第について
- 3章 パヴィアの嘆かわしい炎上の韻文調の記述
- 4章 神の剣がパヴィアを完全に滅ぼさず、驚くべきことに神の憐れみでハンガリー

- 人から解放された次第について
- 5章 パヴィアが聖シュルスの保護を受けて解放された次第について
- 6章 この同上の聖シュルスがパヴィアに来て、予言の力でパヴィアの繁栄とアクィレイアの滅亡を予期した次第について
- 7章 なぜエルメンガルダが夫アーダルベルトの死後にこれほどまでに有力になったのか
- 8 章 ロドゥルフ王のブルグントからの帰還の直後にエルメンガルダが彼に反旗を翻 し、イタリア人に支えられてパヴィアを占拠したこと
- 9章 ロドゥルフ王がパヴィアへと軍を進めたこと
- 10章 エルメンガルダがその狡猾さを駆使し、ロドゥルフを夜に味方のもとを去って逃亡者として自分のもとに来るよう唆した次第について
- 11章 いかにして翌朝にロドゥルフの兵たちがミラノに逃げたのか
- 12章 イタリア人がユーグに手紙を出したこと
- 13章 再びロドゥルフがブルグントに向かい、妻の父であるブルヒャルトの救援を得て戻ったこと
- 14章 ブルヒャルトがミラノに出発した理由、栄誉ある歓迎の後に彼の殺害が決定された理由
- 15 章 ブルヒャルトがミラノからの帰路でノヴァーラにたどり着き、そこで彼と彼の部下全員がイタリア人に殺害されたこと
- 16 章 ブルヒャルト死後にロドゥルフがブルグントへと退き、ユーグがリオン湾から イタリアへと渡ってきたこと
- 17 章 何人かのイタリア人がピサでユーグと会談してヨハネス教皇からの使節団もそこに来て、彼らの忠告を受けて彼はパヴィアに行って王になったこと
- 18章 ユーグの兄弟でトスカナの支配者で、ローマの売春婦マロツィアを妻にしたウィドーについて
- 19章 ユーグ王の多くの美徳、そしてそれらが彼の自制心のなさで損なわれていたこと
- 20章 その時ユーグ王には2人の息子がいたこと
- 21章 いかにしてユーグ王がハインリヒ王の友誼を得たか
- 22章 この王がローマ皇帝に向けてコンスタンティノポリスへと送った使節について
- 23章 皇帝に贈られた2匹の犬とこの犬たちが彼に噛みつこうとしたことについて
- 24章 ユーグ王の使節が皇帝から驚くほどの歓迎を受けた理由
- 25章 ロマノスが殺した獰猛なライオンについて
- 26章 最初にロマノスが提督に任じられ、次いで「皇帝の父」になった次第について
- 27章 ブルガリア王シメオンと戦っていた総司令官フォカスが、ロマノスが「皇帝の父」になったのを聞いて自分から退却したこと

- 28 章 フォカスがコンスタンティノポリスに来てロマノスに捕らえられ、目を潰された次第について
- 29章 最初は修道士だったが後に王となったブルガリア王シメオンについて
- 30章 ロマノスが娘のヘレネをコンスタンティノス帝と結婚させたことについて
- 31章 なぜ皇帝たちはポルヒュロゲネトスの名を持っているのか
- 32章 バシレイオスが主君ミカエル帝を殺した後に皇帝になった仕方について
- 33 章 我らの主イエス・キリストがバシレイオスの前に幻視となって現れてミカエルの死で彼を怯えさせた次第について
- 34章 バシレイオスの懺悔と贖罪のためにした素晴らしい教会の建設について
- 35章 ロマノスが有力者たちに話し、「皇帝の父」になった後に自らが皇帝になった 次第について
- 36章 ロマノスが身分の低い家の生まれであることについて
- 37章 ロマノスが息子のクリストフォロスを皇帝にし、不当にも主君のコンスタンティノスへの優先権を与えたこと
- 38章 ロマノスとシメオンの間で結ばれた和平はいかなるものなのか
- 39章 ユーグ王に対する反乱に踏み切ったパヴィアのワルペルトとゲゾについて
- 40章 王からの謙虚な言伝で彼らが騙された次第について
- 41章 間もなくワルペルトが斬首されてゲゾが目を潰されたこと
- 42章 イルドイン司教と修道士ラテリウス、ユーグ王が前者をミラノ大司教に、後者をヴェローナ司教にしたことについて
- 43 章 ヨハネス教皇が捕らえられて投獄されて殺された顛末、そして彼の代わりに叙階された人物は誰であるか、ウィドーが死ぬとランベルトが辺境伯になったことについて
- 44章 マロツィアがユーグ王を彼女の寝台へと招いたこと
- 45章 ローマへの入り口の砦、ローマにユーグが迎え入れられたこと、間もなくアルベリックによって追い出されて面目を失ったことについて
- 46章 これが神の定めのおかげであること
- 47 章 ユーグ王が兄弟のランベルトを逮捕し、兄弟のボソの提案で彼の目を潰した後 にこの後者をその辺境伯とした次第について
- 48 章 ユーグ王がロドゥルフ王の誓約を受け入れ、贈り物によってハインリヒ王の友好を確保したこと
- 49章 ミロ伯とラテリウス司教の招きでバイエルン人の大公アルノルトがイタリアへと急ぎ、その間ユーグ王が速やかに彼に向けて進んだこと
- 50章 バイエルン兵がユーグの兵に殺されたことについて
- 51章 ミロがアルノルトのもとを去ってユーグ王についた理由
- 52 章 アルノルトがヴェローナの砦を攻め、次いでバイエルンに戻った次第について、

ユーグ王のヴェローナ回復、ラテリウス司教の投獄、彼が書いた機知の利いた本について

KK-	1 1/4	^ r	_
第4	春.	りょ	7

- 1章 この時点までは著者は伝聞を記録してきたが、ここからは目撃したことを記録 するつもりであること
- 2章 ユーグ王が息子のロタールを王に任じ、軍を連れてローマへと向かったこと
- 3章 ユーグ王が娘を介してアルベリックを騙そうとして彼に娘を娶らせたこと
- 4 章 サラセン人がフラクシネトゥムからアックイに来て、そこでの戦いで皆殺しに されたこと
- 5章 同年にアフリカから来たサラセン人に占領されたジェノヴァ、そして同地にある血が流れる泉
- 6章 アルル司教マナセスが自分の教会を捨てて他の教会に行くと言った理由
- 7章 マナセスの行いの不適切さに対する聖書の証拠で裏付けられた反論
- 8章 ベレンガーリオの妻と彼の兄弟アンスカーリオについて
- 9章 ギリシア人と戦って捕虜を去勢したテドバルド公について
- 10章 夫を去勢から救ったある婦人の策略について
- 11章 ユーグが妻の教唆で反逆者となった兄弟ボソを逮捕し、投獄したこと
- 12章 ユーグがボソの妻ウィラをイタリアから追い出した次第、そして相応しからぬ場所で見つかったベルトについて
- 13章 ロドゥルフ王の死、彼の妻とユーグが結婚し、彼女の娘を息子に娶らせた次第について
- 14章 ユーグ王が妾たちのせいで妻を憎むようになったことについて
- 15章 ハインリヒ王の死、彼の埋葬地、彼の息子たちについて
- 16章 息子のオットーを後継者に指名したハインリヒ王の知恵について
- 17章 王位に上る前にオットー王が娶っていたイングランド王の姪について
- 18章 悪しき相談役に唆されて兄に対して反乱を起こしたハインリヒについて
- 19章 ハインリヒ、そして兄に戦争を仕掛けるよう彼を唆した悪魔への韻文調の非難
- 20章 反乱開始時には兄である王にまだ忠実だったハインリヒを城に閉じ込めてフランケンへと連れ去ったエーベルハルトについて
- 21章 エーベルハルトがギーゼルベルトを王への忠誠から唆したやり口について
- 22章 ギーゼルベルトとエーベルハルトがハインリヒを釈放したこと
- 23 章 エーベルハルトが王位のためにハインリヒとギーゼルベルトを騙そうとした狡猾な策略について
- 24章 オットー王が祈祷によって得た驚くべき勝利、そしてハインリヒが受けた戦傷について

- 25章 ハインリヒ王が神聖な槍を手に入れた次第について
- 26 章 この種の勝利や戦争は偶然ではなく神の定めのおかげであることの聖書からの 証明
- 27 章 ブライザッハ城で王が包囲された時に大司教フリードリヒの教唆で多くの司教 が王を見捨てた次第について
- 28章 オットー王の驚くべき勇気と彼が返した答えについて
- 29章 神が王の側に立って戦い、ギーゼルベルトとエーベルハルトがオドーとコンラートによってアンデルナハで殺された次第について
- 30章 教会への途上の王に彼らの死を告げた使者について
- 31 章 オットー王はバイエルン大公ベルタルトに彼らの死を知らせ、彼に自分の姉妹 か彼女の娘を嫁に与えると話したこと
- 32章 以前に王を見限ってから軍を集めるためにメッツ市に向かい、そこで彼らの死 を聞いた大司教フリードリヒについて
- 33章 この同じ大司教が捕らえられ幽閉された次第について
- 34章 王と戦っていた時のハインリヒが姉妹の城に逃げ込むのを彼女によって妨げられた次第について
- 35章 後に再びハインリヒが王の慈悲に我が身を投げ出したことについて

第5章......118

- 1章 シュヴァーベン大公へルマンが娘のイタを王の息子リウトルフに嫁がせた次第 について
- 2章 日食と彗星の出現について
- 3章 ユーグ王の毎年のローマ攻撃について
- 4 章 ベレンガーリオとアンスカーリオの 2 兄弟、アンスカーリオがカメリーノとスポレートの公に指名された次第について
- 5章 ユーグがアンスカーリオに差し向けたサルリオとアンスカーリオの発言について
- 6 章 良き戦士ウィクベルトの良き忠告と悪しき戦士アルコッドの悪しき忠告について
- 7章 サルリオとアンスカーリオの最初の合戦でウィクベルトが殺されてアルコッドが逃げたことについて
- 8章 他の合戦でアンスカーリオがハットー伯を槍での柄で殺し、その後に落馬して 敵に殺され、サルリオが公位を手に入れたことについて
- 9 章 船とギリシア火を入手するためにユーグ王がコンスタンティノポリスに使者を 送った次第について
- 10 章 ユーグ王がベレンガーリオの目を潰そうとしたが、ロタールがベレンガーリオ

- に通報したためにできなかったこと、ベレンガーリオ夫妻の逃亡について
- 11章 ベレンガーリオとウィラの通過を許した山脈に対する呪言
- 12 章 ヘルマン大公がベレンガーリオを迎え入れて王の面前へ連れて行った次第について
- 13章 ユーグ王がオットー王に使者を送り、ベレンガーリオを匿わなければ金を渡すと約束し、彼の要求が拒否された次第について
- 14章 ギリシア人の皇帝ロマノスがコンスタンティノスの息子でもある孫に娶らせようとしてユーグに娘を求めたことについて
- 15章 ロマノスがルーシ人の王イーゴリと戦った海戦とその見事な勝利について
- 16 章 ユーグ王がフラクシネトゥムに進軍し、ギリシア軍を艦隊と共に同じ場所へと送った次第について
- 17章 ユーグがフラクシネトゥムを破壊できず、これを阻まれた次第について
- 18章 ベレンガーリオの家臣で、イタリアの偵察に来たアメデウスについて
- 19章 ユーグ王がハンガリー人と協定を結ぶために来て、彼らをヒスパニアへと送った次第について
- 20章 ユーグ王が妾との間に儲けた娘をコンスタンティノポリスへと送った次第について
- 21章 コンスタンティノポリスの宮殿の強固さと美しさ、ステファノスとコンスタンティノスが彼らの父を宮殿から追放して修道士にしたことについて
- 22章 同上の2人がコンスタンティノスを失脚させようとしたが彼によって捕らえられて修道院に送られた次第について、そして彼らの陰謀を暴露した人物について
- 23章 息子たちが修道院を訪れた時に彼らの父がした嫌みな挨拶と話について
- 24章 息子たちの失脚を神に感謝するロマノス帝の祈り
- 25章 コンスタンティノスとステファノスが監視下に置かれ続けた次第について
- 26章 ベレンガーリオの待望のイタリア到着、マナセスが彼に味方したことについて
- 27章 どの諸侯が最初にユーグを見放したのか、そしてその理由
- 28 章 ユーグ王が息子ロタールをミラノに送ってイタリア人に同情を訴えた次第について
- 29 章 ベレンガーリオがブレッシアから追い出してその代わりにアントニウスを指名したヨセフス司教について
- 30章 ベレンガーリオがピアチェンツァとパヴィアの司教だけを残した理由、リウドプランドの両親が事務官としてリウドプランドをベレンガーリオに推薦した理由
- 31章 ユーグ王がプロヴァンスに有り金全部を持って行ったこと、彼の家臣になったレーモンについて
- 32章 ベレンガーリオの妻が不貞の廉で非難を受けたこと、そして彼女がいかにして自らを救い出したのか

33 章 ベレンガーリオがハンガリー人に払うために貧しい人たちと教会からから取り
立てた金について
第 6 巻137
1章 序文
2章 コンスタンティノス帝がベレンガーリオに使者を送った次第について
3 章 ベレンガーリオが何も持たせずに使者をコンスタンティノポリスへと送った狡
猾なやり口について
4章 前述の使者がパヴィアを去ってコンスタンティノポリスに到着した時のこと
5章 マグナウラ宮と呼ばれる見事な宮殿と使者になされた歓迎について
6 章 何も持たせずに送り出したベレンガーリオのために彼の使者が自腹を切って皇
帝にした贈り物について
7章 皇帝がベレンガーリオの使者を食卓に招いた次第について
8章 見事なデカネア宮とその3つの大きな黄金の杯について
9章 皇帝の食卓で提供された素晴らしい歓待について
10章 皇帝臨席で支払われたお金について
『オットー治世の歴史』 143
付録 ビザンツ帝国の官職・称号156
参考文献